

第3章

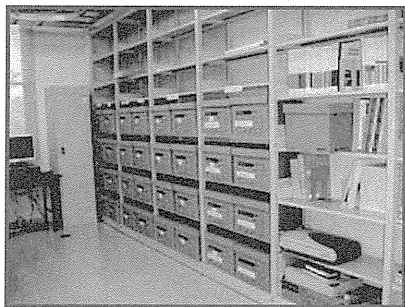
分子研史料編纂室のこの1年の活動

木村 克美 分子科学研究所 名誉教授

1. はじめに

分子科学研究所（分子研）は一昨年5月に創立三十周年を迎え、その機会に史料編纂室が昨年初めに立ち上がりました。今日は、分子研創立の経緯と史料室の現状についてお話したいと思います。

【写真1】史料室の文書保管箱



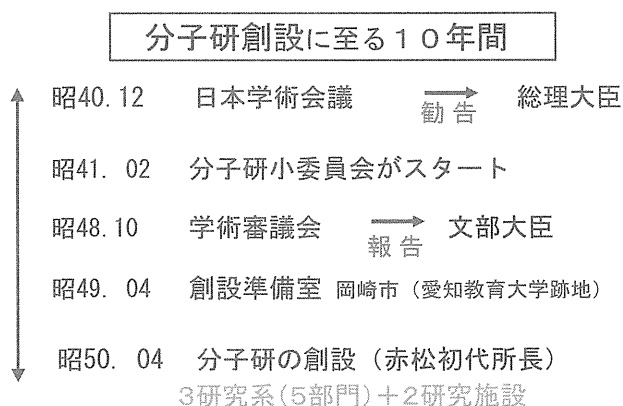
私がこういう仕事を始めましたきっかけは、分子研創立十周年を迎えたとき（昭和60年）、記念誌「十年の歩み」や著書「分子の世界」を出版するに当たって委員長を仰せつかった関係もあったかと思えます。その後、「二十年の歩み」あるいは「三十年の歩み」といった記念冊子は出版されていません。創立三十周年を迎えたこの機会に、分子研の設立に関わる歴史的な資料を収集・保管しようという機運が高まり、史料室が設置された次第です。写真1は史料が保管されている「文書保管箱」の状況です。

分子研は昭和50年に独立の国立共同利用研究所として発足し、一昨年三十周年を迎えるまでの変遷についてまず簡単に説明します。分子研の創

立の6年後（昭和56年）に、同じキャンパスの基礎生物研究所（基生研）および生理学研究所（生理研）と統合し、岡崎国立共同研究機構の研究所になりました。さらに最近（平成16年）、国立天文台および核融合研究所と統合し、名称は岡崎国立共同研究機構から自然科学研究機構に変わりました。

日本学術会議の勧告から分子研の設立までの十年間の主な動きが【図1】にまとめてあります。学術会議の勧告を受けて分子研小委員会（仮称）がすぐにスタートしました。しかし、その後の国内情勢の大きな変動などもあって、分子研創設までほぼ十年かかりました。そこでは、大学付属の共同利用研にするか、独立した国立共同利用研にするかなど、長年にわたって様々な議論が交わされてきたようです。昭和49年になってやっと分子研の創設準備室が岡崎市内の愛知教育大学跡地に設置され、翌年に分子研が発足し、赤松初代所長が就任されました。当初の分子研の構成は3研究系5部門と2研究施設でした（【図1】参照）。

【図1】分子研創設までの経緯



2. 「学術会議の勧告」以前——日本化学会の動向

日本学術会議の勧告に至るまでの重要な動きは、日本化学会に設けられた「将来計画委員会」です。当初は、ジョイント・コミッティとして、薬学会・農芸化学会・化学会の三つの領域の代表者が集まり、化学系の将来計画について議論が交わされておりました。昭和39年には、日本化学会・化学研究将来計画委員会の研究所案の中で「化学系6-7研究所」設立案が提案されています。その後、こうした案が学術会議で議論され、最終的には分子研設立が勧告されたわけです。

分子研第二代所長の長倉三郎先生は日本化学会・将来計画委員会の委員をされておられ、当時の議事録などをもっておられましたので、最近そうした多数の貴重な資料を分子研史料室に提供していただきました。【表1】は当時の資料のリストです（長倉史料1）。これらの資料から日本化学会将来計画委員会から学術会議の勧告までの流れを読み取ることができます。

【表1】化学会将来計画委員会議事録など（昭38 - 40）[長倉史料1]

- ・ 化学研究将来計画 Joint Committee（薬学・農化・日化、昭38.9）
- ・ 日本化学会・第1回化学研究将来計画（昭39.6）
- ・ 日本学術会議・化学研究連絡委員会（化研連）から
- ・ 化学研究将来計画・第一次案（研究所案）（昭39.10）
- ・ 日本化学会第4回化学研究将来計画（昭39.11）七研究所案
触媒総合、分子科学、天然物有機化学、基礎有機化学、
高分子科学総合、地球化学、無機物質
- ・ 化研連 Joint Committee（昭39.12）
- ・ 化学会・農芸化学会・薬学会の合同でシンポジウムの開催計画
- ・ 化学系7共同利用研究所の案（昭39.12）：人員、建物、設備費の案
- ・ 日本化学会・第5回化学研究将来計画（昭40.1）研究所設立案の最終確認

- ・ 高分子科学総合、錯体化学、触媒総合、天然物有機化学、分子科学
- ・ 日本化学会・第6回化学研究将来計画（昭40.5）
- ・ 化学会会長から化研連への報告「六研究所が必要との結論」

3. 「学術会議の勧告」以後 - 分子研小委員会の動向

分子研小委員会は日本学術会議の勧告を受けてすぐにスタートしました。特にそこで注目されますのは、昭和41年から44年まで「東大付置研構想」が議論されてきたことです。当時はそれが基本的な考え方のように思われていた。ところが、大学院構想が難航したことや大学紛争の影響などから、付置研構想は昭和45年に白紙に戻り、新たに「国立共同利用研」の構想で小委員会が再スタートすることになりました。

その後、昭和47年度および48年度の二年間にわたって、「分子科学」特定研究が文部省に認められ、かなり大きな研究費が予算化され、分子科学の研究者に大きな影響を与えました。その少し前の時期に、高エネルギー研究所の設置が決まり、タイミング的に分子研構想が次第に固まってきたようです。

学術会議の勧告から分子研の設立まで十年かかっており、その間、高エ研の設置に長い年月がかかったようですが、分子研小委員会の当初の東大付置研案から国立共同利用研案への転換の経緯などがこれらの資料からよく理解できます。

【表2】分子研小委員会の議事録など（昭41-45）【長倉史料2】

- ・ 第1回分子研小委員会（昭41.2）第2回分子研小委員会（昭41.3）
- ・ 分子研協議会案、親大学との関係、部門設置年次計画および設置場所候補地
- ・ 分子研小委員長からの経過報告（昭41.6）
- ・ 東大理学部化学教室主任からの報告

「分子研を東大の付置研とする条件についての化学教室の意見」

- ・ 第3回分子研小委員会（昭41.8）および第4回の議事録（昭41.10）
- ・ 第2回分子研「原案作成委員会」（昭41.10）
- ・ 分子研小委員会委員長による経過報告（昭42.1）
- ・ 第3回分子研「原案作成委員会」（昭41.11）
- ・ 分子科学研究所（仮称）設立要望書ならびに設立案（昭40.10）
- ・ 冊子の出版：日本学術会議、学研究連絡委員会、分子科学小委員会
- ・ 分子研要項（案）（昭41.11）
- ・ 第5回分子研小委員会（昭42.4）
- ・ 第6回分子研小委員会（昭44.1）重要
- ・ 分子研小委員会委員長から化研連への報告

「分子研小委員会の改組」

- ・ 東大付置研構想から国立研構想へ転換「基本的事項」（昭44年）
- ・ 国立研究所としての分子研の性格と組織（案）
- ・ 分子科学特定研究課題（化研連からの申請、昭45.6）

4. 分子研準備室および創設当時

昭和49年になってやっと分子研の創設準備室が岡崎市内（愛知教育大学跡地）に設置され、翌年に国立共同利用研として発足しました。最近、準備室時代や創設当時の多数の貴重な資料が井口洋夫先生（準備室室長、第三代分子研所長）から分子研史料室に提供されました。これらの資料のリストが【表3】にまとめてあります。

【表3】分子研準備室および創設当時の史料(昭和49～50年)[井口史料]

- ・ 土地および施設の作業部会
- ・ 準備室の移行（東京 → 岡崎）
- ・ 創設協力者会議（教授会議に換わる）
- ・ 分子科学とは：創設の目的・要望・組織などの記録
- ・ 発足から2年目にかけての報告

- ・ 第1回外国人招へい研究員
- ・ 日米協力事業ハワイ会議
- ・ 岡崎大学院問題の懇談会（昭55）
- ・ 総研大に発展した大学院構想（恐らく岡崎における最初の懇談会）

5. おわりに

今後の目標としましては、オリジナル史料の複写およびデジタル化も進めたいと考えております。さらに、分子研創設当時の多くの関係者に資料の提出を依頼していく予定です。なお、上記の資料の外に、【表4】にまとめた若干の資料が分子研関連の事務局や図書館から提供されております。

【表4】 その他の資料（事務局および図書館から）

- ・ 分子研設立要望書ならびに設立案
- ・ 分子科学特定研究報告、分子研要項など冊子5点
- ・ 創設披露宴および十周年記念式典などの写真（アルバム約30冊）